

河村市長南京発言を検証する緊急市民集会
(2012年3月31日午後0時より5時 名古屋市教育館)

1. ドキュメンタリーフィルム『フィルムは証言する南京大虐殺から半世紀』上映
2. ビデオ上映 (3分) 『2月20日の川村発言』 「通常の戦闘はあって残念だが、南京事件はなかったのではないか」 (民放テレビのダイジェスト版)
3. 主催者からの問題提起 (平山良平)

1997年(南京大虐殺60周年)に名古屋で「南京大虐殺電話ホットライン」を開設したとき、元兵士から、「名古屋の第6連隊は南京まで行っていないから名古屋で電話聞き取り調査をやってもおそらく無駄でしょう」と言われた。スクリーンに「日本軍の南京包囲網と城内外の虐殺現場図」と上海から南京への「南京攻略戦経過要図」そして「日本軍と松井石根の南京入場式」を写真報道した新聞記事を映しながら、17日の入場式に皇族の朝香宮鳩彦司令官が行進することから中国軍兵士への掃蕩作戦が徹底されたことにも南京大虐殺の一つの原因がある。その上で、「河村市長南京発言を受けての問題提起」の文章の冒頭部分を読み上げた。「南京大虐殺とは、1937年12月4日から翌38年3月までの日本軍の南京攻略戦と南京占領時における中国軍民に対して行なった戦時国際法と国際人道法に反した不法残虐行為の総体のことをいう。……南京大虐殺を総合的に検証した結果、10数万、それも20万人に近いが、それ以上の中国軍民が犠牲になったと推測されています。「極東国際軍事法廷」、「出廷する松井石根」、「南京軍事法廷」そして「サンフランシスコ講和条約での吉田茂」の映像を示し、二つの軍事裁判の、極東国際軍事裁判判決では「南京城内とその近郊で虐殺された民間人と捕虜の総数は20万人を超える。ただし、この数字は日本軍によって揚子江へ投棄されたり、その他の方法で処理された死体は含まない」とあり、南京軍事法廷は「その犠牲者総数は合計30余万人である」と判決している。サンフランシスコ講和条約第11条(戦争犯罪)「日本国は、極東国際軍事裁判所並びに日本国内及び国外の他の連合国戦争犯罪法廷の判決を受諾し、…」のとの関わりでみるならば、南京大虐殺・犠牲者総数30万人余を認めないことは国際社会への背信行為でもあると述べた。揚子江の虐殺死体(村瀬守保撮影)の2枚の映像を映しながら、河村名古屋市長は「通常の戦闘はあって残念だが、南京事件はなかったのではないか」と発言したが、12月13日以降は通常の戦闘はなく、あったのは中国軍民の虐殺であったことを、本日の証言者と講演者が明らかにされるでしょう。証言者(三上翔さん)は映像に映し出されている「駆逐艦うみかぜ」の甲板から、筏に積み上げられた死体を見、対岸の中山埠頭で、トラックで運ばれてきた中国人が機関銃で撃ち殺されていたことを証言されるでしょう。スクリーンに「烏龍山と幕府山砲台付近で捕虜となった中国兵」を映し出し、講演者(小野賢二さん)は会津若松の歩兵65連隊の元兵士

を訪ね歩き聞き取り調査と彼らの陣中日記をもとに、揚子江岸で中国軍捕虜15000人を16日と17日に射殺し、石油をかけて焼き、18日、19日の両日にわたって揚子江に流したことを明らかにされるでしょう、と証言と講演を紹介した1937年7月7日の柳条溝事件を報じた名古屋の新聞記事、大山事件を報じた新聞、いわゆる「暴支膺懲」の近衛声明を報じた新聞記事、日本海軍航空隊が南京を渡洋爆撃した新聞、呉淞に敵前上陸した新聞、「護国の精華・敵前上陸の犠牲者」の顔写真が並べられた新聞8月29日、9月14日、同15日付の新聞を映し出し、日本軍兵士の戦死の多さを示した。11月5日の杭州湾敵前上陸の新聞、白ぼう（草冠に卯）口敵前上陸、皇軍怒濤の如く、12月11日付の「南京陥落」の新聞をスクリーンに映し出した。次に映し出したのは元兵士東史郎が12月11日に南京近郊で拾った中国側の「伝単」（ビラ）です。それは縦2列計8コマの絵が描かれています。野心家 的落場 陳凱中作 1垂涎 2大陸政策 3侵略開始 4得（こごとへんに龍リュウ）望蜀（ろうを得て蜀を望む） 5四面楚歌 6幻滅 7雄心（1字不明）付東流水 8最後勝利

日本政府・日本軍が「暴支膺懲」で始めた日中全面戦争で南京大虐殺を象徴とする残虐行為を中国軍民に加えた。しかし、日本が無条件降伏したとき、蒋介石は「報怨以德」を中国軍民に布告し、日本兵への報復をさせなかった。戦後、国民党政府も、中国共産党政権も日本に対して戦争賠償を請求しなかった。

サンフランシスコ講和条約を受諾し、東京裁判や南京軍事法廷の南京大虐殺にかかる判決を受け入れたことによって、日本は国際社会に復帰することができた。しかしながら、河村市長は「通常の戦闘行為はあって残念だが、南京事件はなかったのではないか」と南京大虐殺を否定する発言をした。この河村発言は、日本政府の武器輸出3原則の緩和、秘密保全法制定の動き、東京都や大阪府・大阪市が教育基本条例を制定し日の丸・君が代を強制する動き、つくる会系の教科書を採択させる動きと基を一つにしています。市民のさまざまな連帯でこのような動きを止めましょうと運動課題を提起しました。

4. 証言 三上翔さん（元海軍兵士）1時15分～（証言補佐として林伯耀さんが同席）

南京陥落の日、三上翔さんは揚子江江上、中山埠頭の前方に停泊した駆逐艦「うみかぜ」の1番砲塔におり、18歳、日本海軍で最年少の乗組員でした。現在93歳になるが、74年前を話し始めると眼前に光景が浮かび上がってくるかのごとく話を展開させる。

1937年10月半ば、「うみかぜ」、「かわかぜ」、「すずかぜ」、「やまかぜ」の4隻の駆逐艦は上海に向かい、揚子江を遡行部隊として南京攻略戦に参加しました。12月13日中山埠頭に急迫したとき、砲撃を受け4隻の駆逐艦は一旦退避行動をとった、が追撃もこないことからこちらからの艦砲射撃を打つわけですが、そのころの海軍の艦砲射撃といえばものすごく正確なものでした。高いところにある射撃室で照準をあわせ、それを各砲塔に通じ、その目標を追尾す

れば砲弾が正確に発射される。1分間に3発、5門の大砲、4隻で60発、逃げもできないくらいほどの激しかったと思いますよ。砲撃が終わった後、中山埠頭に行く。その当時は建物はなかった。停泊中に4つの筏が流れてきました。整然と積み上げられた中国人の死体の山でした。整然すぎるので何か隠れているのではないかということで、15人くらいの兵が三八式歩兵銃で、腰だめで撃ちまくった。なんの反応もなく4つの筏が流れて行ったのであります。そのあとは静かな揚子江でした。4隻の軍艦の舳先には日の丸を掲げ、マストの先に軍艦旗が翻り、艦尾にも軍艦旗は翻り、まさに日本帝国主義の象徴でありました。何事もなく過ぎ去って、17日、今日は南京の入場式の日だということで陸戦隊を編成し、私もその一員として中山埠頭に上陸しました。川岸から城内へ続く道路があります。大きなメインストリートですが、一面に脱ぎ捨てられ衣服が路面が見えないくらいに散らかっていました。それを過ぎ去っていきます挹江門に到着します。開口部分が三つありますが、全部土嚢で塞がれ中央部分の端っこに人が通れる位のすき間があり、そこを歩いて城内に進入します。さらにそこから数百メートルであろうところの中山北路の標識に沿って行くと、やがて入場式の待機場所。待機時間中に、周辺を見て回ったのであります。その中山北路から入り込んだ街の中のテニスコートや小公園、ちょっとした広場には、広場の大きさに応じて、死体の山が二つ、三つ、五つと築かれています。特別兵隊らしきものはなく、老若男女といますか、老いも若きも男も女も子供もおった、もう無残な殺され方をして、山のように積み重なっておった。この寒いのに裸の死体が、あるいは四人、五人の数珠つなぎの者、後ろ手に縛られた者、あるいは銃剣で刺された者、小銃で撃たれた者、もう、あらゆる殺され方をした人々で築かれた山がありました。また、ある家では、血みどろになって固まった血潮の中で、頭のない死体が二つ転がっています。その人たち、斬られた首は縮こまって胴体の中に吸い込まれている有様でした。私まだ18歳、スゴク怖い、ショックを受けました。中国の首都・南京のこの静けさは一体なんだろう、物音一つしない、生きているものが何もいないというような無残な街を見てまいりました。その日、やっとひとりだけ生きた中国人を見ることができました。帰り道、その中国人は日の丸の腕章を付けていました。日の丸といっても、丸がどうだといったことではなく、ただ白い布キレに赤い丸を描いたものに過ぎないけれども、そういった者ひとりが歩いていく。海軍にそんな者にいたずらしようと思うものはひとりもいません。その日、もとの船に帰って休むことになりました。海軍というもの、3ヶ月ぶりに陸上に上がる、ととても嬉しくてね、そりゃ、今まで足に地面がなかったものが、地面がある、丸でハイキングに行ったように嬉しかったことを今でも覚えてます。それから一日、二日、三日と何事もなくたちます。翌日、駆逐艦「うみかぜ」の艦橋に立ちます。ブリッジですね、船のあらゆるものの中心部です。そこの見張り番の当直をしてました時に、ドドドドドッと機関銃の発射音が聞こえます。振り返りますとその中山埠頭で、いつの間にやら陸軍が、重機関銃の銃座をつく

る、そこで、トラックに運ばれてきた人であろう人々が、川岸に追い落とされてドドドン、ドドドドドドド、ドドド、ダダダダダダ、とリズムがあるの、不思議なことに、機関銃の撃ち方には“なぎ射”というダダダダダダとなぎ倒す撃ち方と、タタタンタタタン、タタタンタと“てん射”という撃ち方があります。それを織り交ぜてひとしきり鳴り響いたその合間合間に怒りの声か悲しみの声か、もう、何とも言えない状況を見たわけです。みなさんはこのようなことを見ることは絶対に有り得ない、私は現在進行形の殺人劇を目の当たりに見て、もう、毎日毎日それが続きます。それが12月18日の午後ですがそれからというものは、毎日毎日とトラックで運んでくる、それが20人から30人というところが、そのトラックの収容力であったろうと思います。私だけが言っているだけじゃなく、他の人の言っていることを聞いても20人から30人運んでくると言っています。そうして運んできた者を、今言ったようにダダダダダーとダダダダダー、ダダダダダー、ダダダダダーとタタ、タタ、ターン、ターン、ターン、とリズムがあってネ、始まり、始まりと終が分かりますよ音で。それをまた、私はブリッジの当直の時、暇な奴らがおお、俺にも見せろよと寄ってくる。しかし、みなさんなんでもこういう事になったんだらうか、こんなことしていいのだから、終戦後、その答えがでたわけです。その時はね、中山埠頭、この一帯、は下関（シャーカン）というところですよ。揚子江から南京への河からの玄関口です。そここのところに外国の商社も来ています。中山埠頭から1000m有るか無いか分かりませんが、ユニオンジャック・イギリスの旗が翻っていることもありました。だから、あったの、なかったと言ってみたところで、外国の人はちゃんと見てる、そう思いますよ。そのような残虐なことを日本兵がやってのけたということは、何も殺人鬼、あるいは強姦魔を戦場に送ったわけではありません。それぞれ、ふるさとにあっては、いいお父さんだったり、いい兄貴だったり、頼もしい青年だったり、あるいは町内会の模範青年だったりする人が、一度戦場に駆り立てると、殺さなければ殺されるという不条理が働きます。できることなら、相手が気づかん間に殺してしまえば、こちらの気も楽だろうということです。私が南京の入場式に持って行った小銃だってそう、銃剣はだいたいピカピカに光ったもの、私が南京に持っていった時のものは、銃剣に黒メッキがしてあります。そのメッキは、人の姿は見えなくても、ただ、ピカッと光ると、ありゃ何だということに注意力が働きます。働けば、先にあちらが発見して、こちらがやられるという、そういうことがないように迷彩服を着てみたり、あるいは銃剣に黒メッキにしたりしているのであります。そのようなことを含めて、どうすれば相手を先にやっつけられるか、これが戦場の掟なのです。それが、南京が陥落した後にそういうことをやってのけた人々は、故郷にいれば、皆ほとんど、全員、良い人なんです。それが戦場に駆り出されて、殺さなければ殺されるという極限状態を体験すると、人間が壊れてしまう。まさにその元凶は戦争です。そしてやがて日本は、1945年8月15日、無条件降伏ということになって、連合国に降伏しました。そのあ

と、東京裁判、平和条約そういったことから、私どもは、新しい憲法ができ、人権の尊重だ、国民一人ひとりが主権者であるといった社会になりました。あの戦争でアジアの人々を2000万人といわれる人々を犠牲にし、また日本人も310万人もの人が戦争の犠牲になりました。主要な県庁所在地の街でなくとも、賑わいのある街は空襲を受けてほとんど焼け野原になったような、そういうところから平和憲法の下で立ち上がり、今日に至る繁栄を得たのであります。そのことはいわゆるこの平和憲法、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と武力による威嚇または武力の行使は国際紛争を解決する手段としては、これを一切、放棄するという、国権の発動たる戦争さえも否定する。昔は10年毎に戦争がありました。明治27,28年の日清戦争、また10年もしないうちに、次に明治37,38年の日露戦争、続いて大正時代に入って、第1次世界大戦、ヤシベリヤ出兵ということになります。その頃は社会保障なんてありゃしない。一家の中で、誰かが大病を患おうものなら、たちまちにして破産状態になります。そういったことに、一切の軍備を否定し、先程の戦争放棄、そのためには、陸海空軍その他の戦力はこれを保持しない、国の交戦憲は、これを認めないという、もうなんとも羨ましい憲法で、あの憲法が生まれたとき、野坂参三という共産党の議員さんが、自衛権がないではないか、自衛権はこれをどうするのか、といったら吉田茂さんが、自衛権なんちゆうことは、昔は言ったけれども、アジアの平和のためだということで軍隊を出した、それからすれば、もう一切の自衛権も何も、そういうことは考えないと言っていたのがその時代。今どうですか。君が代を歌え、日の丸を揚げよと言っている。日の丸であろうと、君が代であろうと、一度は国を滅ぼした張本人そのもの、そういったことを私はつくづく思うのであります。私は南京戦からまもなく、航空隊の方に代わります。海軍というところは、試験に合格しさえすれば何兵からでもいけます。ずっと教員を勤めて、最後は女満別の飛行場で終戦を迎えました。そして9月3日、愛媛県の我が家に帰り着きました。なんとまあ、私が教官時代に死に方を予科練の卒業生に、あるいは学徒出陣の人々に死に方を教えてきましたが、私が生き延びてしまった。何か申し訳ないことと思いますが、もうなにやら、一度は生き延びて、必ずや平和のために私は尽くしたいという思いで、先程私はもたもたと歩いてきましたが、我が家にいれば、電動車椅子で走り回ってというか、あれを転がしています。あちらに行っては年金者組合、病院に務めていましたので、そちらの方の平和の会議とか何やかやで、そうしたことをやっています。南京のことを話せる人が私一人しかいないので、わたしがあと10年も生きるはずもない、せめてあと3年生きたいと思っています。なぜなら、3年たてば3度目の年男、二八の十六、96歳になります。みなさんとともに、平和を語るチャンスがあれば、うれしいと思います。どうぞ、みなさん、何事にも負けず、平和憲法を両手で握り締めて、皆さんと共有することをお誓い申し上げて、私の本日の話を終わらせていただきます。

5. 講演 小野賢二さん 小野賢二さんは会津若松の歩兵65連隊の元兵士を訪ね、聞き取りあるいは陣中日記を検証して、長江沿岸で約2万人の中国人捕虜が16日、17日、に機関銃で殺され、18日19日の両日にわたって死体を長江に流したことを明らかにしました。この歩兵65連隊による捕虜の虐殺を検証するための調査を同行取材して一つのドキュメンタリー番組として制作された日本テレビの「兵士たちが記録した南京大虐殺」の上映があり、本集会参加者は小野賢二さんの10年に及ぶ聞き取り調査の大変さと、そのことによって明らかにされた65連隊兵士の虐殺の実態とともに彼らの苦悩をよく理解できたことと思われれます。福島県いわき市に今も住む小野さんは、後半、65連隊の元軍医・木村守江が後に参議院議員、さらに衆議院議員（3期）となり、1964年に福島県知事に当選し、福島原発の誘致に関わったことを話された。

6. 団体・個人からの発言

① 松岡環さんからのメッセージ 朗読

② 池住義憲さん（立教大学徳人教授） 3月26日～29日間に南京に滞在
朱成山館長は、大変な怒りと憤りを強く示された。歴史と向きあって、きちっと受け入れることしか友好と和解の道はない。南京大虐殺を否定するようでは友好関係はできない。河村市長には、南京に来て下さい、見てください、30万人の虐殺の証拠と証言がある、南京に来て、見て、きちっと学んで欲しいと言われておりました。

朱成山館長からの3月28日付「河村市長南京発言を検証する緊急市民集会」宛へのメッセージ、「『河村反対』は、決して名古屋市民を敵視するものではありません」とのネットユーザーへの訴え、南京大虐殺記念館朱成山館長から2月21日付河村市長宛の「公開抗議書」、アジア太平洋平和文化フォーラムから河村市長宛の「“南京事件否定発言”に関する公開質問書」を紹介し、週明けにも河村たかし名古屋市長への抗議要請活動を行うという。

③ 富田好弘さん（日中友好協会愛知県連合会理事長） 3月26日から29日に南京に滞在

これは3月1日の中国の新聞ですがと、全面を使って河村市長発言に関わる記事で埋められている新聞を示し、中国での河村市長発言の問題性をまず指摘し、4点について話された。①河村市長発言が変転していること ②旅行取りやめ、日本への留学を考える、交流計画が中止、旅行業界に影響が出るなどの実害が出ていること ③上海大学での質問10項目があるが、河村発言がどうして出てくるのか全く理解できない、日本はなぜ反省できないのか、それを知りたいということ。 ④南京市と名古屋市の交流は停止しているが、江蘇省と愛知県の交流は続ける、中国は日本との交流を深めたい、民間の交流も拡大したいが、これまでの日中30年の交流の到達点が河村発言によって壊されてしまっていることを報告しました。

④ 南守夫さん（愛知教育大学教授）

戦争の記憶について日本とドイツを比較してきたという視点で言えば、ドイツではアウシュビッツの虐殺を公的な立場で否定する発言をすれば、到底その立場にいることはできない。そういう意味では表現の自由に制限がつけられている。しかし、日本では河村市長や石原東京都知事のように、学問的に確定されていることを否定することがたくさんあるが、その地位を追われる者はほとんどいない。平気で同種の発言を繰り返すということが起きる。なぜこういうことが許容されるのか、それを許容させているものは一体なんなのか。このことに目を向けなければならないのではないか。河村発言の問題点の一つは、河村さんの「思い込みの強さ」という個性です。東中野の本を信じて、国会議員としての質問主意書に二度も東中野の本の主張が引用し、それが信念になっている。南京市からの訪問団に面と向かって「南京事件はなかったのではないかということを行った上に、南京で討論会を開いて教えてやろうと言う人はいない。ドイツでは、専門的な学問研究を尊重して、素人の政治家が安易にそういうことを発言しない、そういう意識が作られてきた。日本では小野賢二さん、洞富雄さんらの南京大虐殺に関する学問研究と調査研究の成果が、世の中に反映されていない。東中野が解釈の仕方、動かぬ証拠となったことを否定しようと公然とたくさん本を出して影響を与えている。学問の成果がきちんと受け入れられていく社会をつくることが重要です。

⑤ 林伯耀（旅日華僑中日交流促進会事務局長）

B2版の手描きの絵図を指で差しながら、これは揚子江岸の虐殺の図で、実際の元兵士・カジタ二さんが描いたもので、首都南京の入城直後、12月14日午前2時、月光の下で恐るべき光景を見たというものです。4列縦隊の中国軍兵士が4、5m置きに並んだ日本軍兵士の監視の下に揚子江岸に向かって殺されに行つたもので、彼が見ただけでも3000名はいたと言っていた、これは14日であるから、小野賢二さんの調査した65連隊の虐殺とはまた別のもののように、と話された。

二つ目は日中青年の交流事業でのこと、1998年のこと、旅日華僑交流促進会の日中青年交流のことで、華僑の青年30人、日本の青年90人、中国大陸の青年70人が参加するもので、その計画にマツダが36台の車を提供してくれた。神戸-上海-南京-徐州-済南-北京の2000kmの自動車ラリーです。神戸から上海に船が到着し、夜の交流会でのこと、マツダのスタッフもいて、そのひとりが、日の丸と五星紅旗を並べたステッカーを見せ、これを車の横に貼り、日中友好で走りましょうと提案した。一瞬の後、中国の警備担当者らがいっぺんに、「そんなことをして走ったら、どうして200名もの人を安全に通行させることが出来るのか、あなた方が日の丸を付けて上海から南京、南京から徐州に向かって走ったら、どんな人があなた達に何をやるか分からない。この地帯だけでもどれほど多くの人たちが自分の身内が日本軍のために殺されていったか。その人たちはそ

の旗を見ただけでもう何をするか分からない。我々はあなた達の身の安全を一切保証できない」と言った。これを聞いて、改めて中国人の傷の深さを知ったのです。

中国の学者、台湾の学者が、日本軍が中国で行なった虐殺について、本に記述されるもの3700件、その中で、100人以上の集団虐殺は1928年の済南事件以降1945年8月までで390件あり、かつて日本軍が中国を侵略していた時代、南京大虐殺だけでなく、大なり小なりの中南京、小南京事件が起こっている。1968年、ベトナムでソンミ村事件が起こり、約500人の村民が虐殺された。これが世界中に報道され、反戦運動につながり、ベトナム戦争の遂行の妨げとなった。残念ながら、あの時代、中国ではそんなに多くの外国人記者がいません。大小の虐殺事件が起こった。南京大虐殺事件というのは、中国人にとって血、肉なのです。ホロコーストとはユダヤ人にとって血肉となっているように、中国人にとってかつての日本の侵略戦争における被侵略の事実、その象徴的な南京大虐殺事件というものは中国人にとって自分たちの感情、体そのものです。だからそれを否定されることは自分たちの存在を否定されることだということを知って欲しい。余りにも日本人たちは知らなすぎます。侵略戦争の時代に日本軍がいかにか中国人を人とみなさないで、中国人を抹殺してきたことを知って欲しい。かつて軍隊が銃を持って剣で刺し、中国人を殺害しました。ところが戦後、日本の戦後、どうしてこうも何度も何度も虐殺の事実を否定するのか。あなたちはもう一度中国を侵略するつもりですか。今、あなた達は中国を陵辱しています。第1回目は銃でもって中国人を陵辱したが、今は第2回目の陵辱をやっている。日本人はあまりにも歴史をピシッと検証していない。私は、実は、小野賢二さんから学んで、南京大虐殺の調査にいったんですよ。ですけれど、あのきれいな日本の農村の中で、老人たちが過去の虐殺を語ってくれたその重さ、しかしその老人たちは子や孫には語れない。語ればお前は皇軍に恥をかかすのか、さまざまな右からの圧力がある。言わせない、語らせない、知ろうとしない。そして戦後、日本はずっと過去の戦争に対してピシッとした総括、反省がない。私はもう一度、日本のみなさんに歴史をピシッと検証し、間違いは間違いということ、はっきり認めるということを、もう一回やるべきではないでしょうか。

⑥ ジョー・エサティエ (大学教員)

私は湾岸戦争の頃からアメリカの戦争、戦争の原因、なぜアメリカはイラクを攻撃するのかと考え始めて、戦争の歴史、虐殺の歴史について勉強しました。南京大虐殺で中国人が30万人殺されました。コロンブスもアメリカ大陸に来て30年の間に先住民族を30万人殺しました。今のアメリカは、虐殺ではじまりました。アメリカの先住民族を殺しました。土地を盗るため、資源を盗るため、計画的に虐殺してきました。アメリカ大陸から、フィリピン、ベトナム、イラク、アフガニスタン、パキスタンでどんどん虐殺しています。第2次世界大戦で、ドイツの敗戦間近で諦めているときに爆弾を落としました。日本に原爆を落としま

した。原爆を落とさない日本人もアメリカ人も多くの人が死ぬから原爆を落として早く戦争を終わらせた方が良かったと教えられ、そう信じてきました。でも違いました。戦争を続けさせない、戦争を起こさないためには、歴史を忘れない、私は教員ですから、それを次の世代に伝えること、真実を伝えること、将来の戦争・アメリカは今イランを攻撃しようとしています。イランの戦争を止めたいと思っています。

⑦ 黒田薫（南京60か年大阪実行委員会）

南京大虐殺がどんなにひどい殺戮であったかということは、本日の映画上映、三上さんの証言のなかで、そして小野さんの映像と講演で、ありありと浮かび上がってきますけれど、この映像、証言を介して、南京大虐殺がなかったとどうして言えるのか、私は河村市長聞いてみたい気持ちで一杯です。人間ですから、日本人ですから本当に頭を下げて中国の人々に謝罪するしかないんですけども、どうしてあんな発言が出来るのか、悔しくてなりません。これを許している私たちの社会も大きく問われていることと思います。これは10年前、私たちが南京大虐殺のパネル展を開いた時に作った図録集です。これは、強姦され、腹を切り裂かれ、腸がウネウネと飛び出でている女性の写真です。私は南京の記念館でこの写真を前にして、体中が総毛立ち、その場から離れることができませんでした。どんなに苦しかったことでしょうか、どんなに痛かったことでしょうか、どんなに悔しかったことでしょうか、私はその女性を見て限りない思いを寄せました。こういうことをした日本兵は、私たちの父、あるいは祖父の時代の日本人なのです。女性として思いを寄せる日本人であります。加害者としての日本人でもあります。この大きく引き裂かれたまま南京大虐殺を伝えることにしようと、運動に関わってきました。この写真が私の運動の原点です。河村市長の発言は南京の人を二度殺し、南京の人を二度傷つけ、そして、アジア、中国にあったわずかな日本に対する信頼をすべて打ち砕いてしまいました。日本の平和と友好を愛する市民、なかならず南京と友好を築いてきたこの名古屋の反戦平和、反侵略の活動をしてきた多くの市民の方々を河村市長は裏切ったのだと思います。この河村市長の発言を皆さんと同じように決して決して許すことはできません。これは名古屋だけのことではありません、私の住む大阪府では維新の会の橋下市長による日の丸・君が代の強制、教育基本条例の制定が推し進められています。しかし、大阪の市民運動はこの橋下市長に対して、反独裁、半ファシズムの運動が大きく動き始めています。私たち南京60か年大阪はこれらの市民運動とも連帯し、今年7月に南京大虐殺の絵画展をもう一度開きます。そうして若い人たちに南京のことを知ってもらう運動を進めてまいります。

7. 集会宣言採択

河村市長南京発言を検証する緊急市民集会 宣言

1. 私たちは、南京からの訪問団に対する「(いわゆる)南京事件というのはなかったのではないか」という2012年2月20日の河村たかし名古屋市長発言に

対して疑問を感じた市民が、その後の河村市長発言やその考え方も検証するために、本日名古屋市教育館で、「河村市長南京発言を検証する緊急市民集会」を開きました。

2. 南京大虐殺とは、**1937年**の日本軍の南京攻略戦と南京占領時における中国軍民に対して行なった戦時国際法と国際人道法に反した不法残虐行為の総体のことをいいます。侵略戦争の計画・実行に関わったA級戦犯を裁いた極東国際軍事裁判（東京裁判）判決（**1948年11月4日**）は「日本軍の占領中最初の6週間の間に南京城内とその近郊で虐殺された民間人と捕虜の総数は**20万人**を超える。・・・ただし、この数字は日本軍によって焼かれた死体、揚子江へ投棄されたり、その他の方法で処理された死体は含まれない」とし、BC級戦犯を裁いた一つである南京軍事法廷は「その犠牲者総数は合計**30余万人**である」と判決しています。**1951年9月8日**に日本と連合国と調印したサンフランシスコ講和条約**11条**（戦争犯罪）には、「日本国は、極東国際軍事裁判所並びに日本国内及び国外の他の連合国戦争犯罪法廷の判決を受諾し、」と明記されており、日本は戦後再出発するにあたり東京裁判の判決を受け入れ、南京大虐殺の事実を承認しました。この集会で証言された元日本海軍第三艦隊第十一戦隊第二四駆逐艦隊の乗組員は、長江（揚子江）に停泊中の「うみかぜ」の甲板から**12月13日**以降、中国人の死体が整然と積み上げられた筏をいくつも見、**18日**以降**25日**までは中国人が中山埠頭に運ばれて機関銃で撃ち殺されるのを見張りの時間中に見ていたと証言されました。また今日の講演者である小野賢二氏は、会津若松で編成された歩兵第**65**連隊の元兵士を訪ね歩き、何年も聞き取り調査をすることによって、**12月16日**と**17日**の両日にわたって白旗を掲げ投降した中国軍捕虜**15000**人を機関銃で射殺した上、石油をかけて焼き、死体を**17日**と**18日**の両日にわたって長江に流したことを明らかにしました。

3. 河村市長は、後に「**30万人**規模の大虐殺はなかったという趣旨だ」と述べているようですが、こうした経過を踏まえると、河村市長は、「虐殺被害者数の問題が解明されなければ、南京大虐殺事件は虚構である」という主張に似ていると思われまます。問題は、日本軍が多数の中国軍民を虐殺（不法殺害）したという事実です。また、河村市長は「発言は政府見解とほとんど同じ」と述べているようですが、例えば、**2006年6月13日**に当時衆議院議員であった河村氏が提出した「いわゆる南京大虐殺の再検証に関する質問主意書」に対する**6月22日**の小泉首相の答弁書では、「**1937年**の旧日本軍による南京入城後、非戦闘員の殺害又は略奪行為等があったことは否定できないと考えている。」としています。河村市長は、「政府答弁では、虐殺とは言っていない」という趣旨のことを述べていますが、「非戦闘員の殺害」はまさに不法殺害（虐殺）です。政府見解と河村市長見解とは「ほとんど同じ」とは言えないものです。

河村市長は「通常の戦闘はあって残念だが、南京事件はなかったのではないかと」も言っています。しかし12月13日の南京陥落以降は通常の戦闘行為はほとんどなく、連日行われたのは日本軍による掃蕩作戦で、国際法の規定を無視し、中国兵と目されたものは摘出・連行され南京城内外で殺され、また兵士による殺傷、略奪、放火、強姦が行なわれたのであり、これが南京大虐殺といわれるものです。私たちは河村市長に、これらの事実を踏まえ、「南京事件はなかったのではないかと」の発言を撤回し、南京大虐殺を歴史的事実として認め、改めて南京市との友好関係を発展させることを求めます。

4. 河村市長は、あのような公的な場で「(いわゆる)南京事件というのはなかったのではないかと」発言をしたのですが、その後その発言は「名古屋市の公式見解ではない」という趣旨を述べています。しかし、南京市訪問団を迎えての名古屋市長としての発言が名古屋市の見解でないというのは無理があります。また私的見解であるとするのであれば、なぜ公式の場で敢えて発言をしたのかと言うことが問題になります。こうした問題も、河村市長は改めていくべきです。

5. 私たちは、間違った歴史認識発言を繰り返したり、発言趣旨をごまかして正当化しようとする河村氏を名古屋市長にしている市民としての責任を感じています。その意味で、南京市民と中国の皆さんを傷つけたことを本当に申し訳なく思います。私たちは、過去に日本軍が多く南京市民などを虐殺した歴史を直視しつつ、そうした事実に向き合おうとしない人々がいる現状を微力ながら変えて行かねばならないと思っています。そのような立場から、私たちは南京市民との友好関係を築いていく必要があると感じています。決して「南京へは行きたくないやあ」というふうには考えません。むしろ、不幸な歴史を繰り返さないために、積極的に市民同士が交流していくことが重要であり、そのような努力をしていきたいと思っています。

6. 市民の皆さん。私たちは、以上のような思いで今後も皆さんと共に歴史に向き合っていきたいと思っています。そして、名古屋の友好都市である南京市民の皆さんと市民レベルで交流することを目指したいと思っています。これを機会に、手を携えて立ち上がりましょう。

2012年3月31 河村市長南京発言を検証する緊急市民集会参加者一同

